

令和 3 年 6 月 6 日現在

機関番号：24501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K18018

研究課題名（和文）琉球王国最末期の漢文学者・蔡大鼎の日本・中国・琉球に関する知の形成と集積

研究課題名（英文）The Formation and Accumulation of Knowledge about Japan, China and Ryukyu on Sai Taitei as a Ryukyuan Writer of Chinese Poems and Proses in the Ryukyu Kingdom's Last Days

研究代表者

紺野 達也 (KONNO, Tatsuya)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00506157

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：琉球王国最末期の漢文学者である蔡大鼎は漢籍から知を広く集積し、自らの漢詩文に用いるとともに、中国古典詩における詩題・詩型と内容の関係についても一定程度理解していた。さらに、蔡大鼎は中国の人士との間で尺牘（書簡）や詩歌を応酬するとともに、詩文集に対する序等を得ており、これらは彼の中国に関する知の形成に大きな役割を果たした。

また、蔡大鼎は日本や琉球との人々との交流を通して、琉球の文芸や日本の和歌に対する関心を示しており、かつ自らの漢詩文にそれを表現した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果の学術的意義は、琉球王国最末期の士族の文化的営為であり、また彼等の教養の水準をも示す漢詩文がどのようなものであったのか、そして、その背景となる知の形成・集積の諸相の一端を蔡大鼎とその作品を通して解明したことである。

近世琉球の漢詩文集は明治初年の琉球処分による国家の崩壊の後、その多くが徐々に沖縄県外に流出し、また沖縄戦で焼亡してしまった。したがって、新たに発見された漢詩文集を研究対象とした本研究がこれまで知られていない琉球王国の新たな一面を提示したことが本研究の社会的意義であると言える。

研究成果の概要（英文）： Sai Taitei was a Ryukyuan writer of Chinese poems and proses in the Ryukyu Kingdom's Last Days. He accumulated the knowledge from Chinese classics for his Chinese poems and proses. He also understood the relationship between titles or forms and contents in Chinese classical verse to a certain degree. In addition, Sai Taitei and Chinese people exchanged epistles and poems. Furthermore, Sai Taitei took introductions of his prose and poetical works from Chinese people. These epistles, poems and introductions played a major role in formation of knowledge about China.

Sai Taitei showed an interest in the Ryukyu's literature and Japanese Waka through the relationships with the people of Japan and Ryukyu. In addition, he expressed the interest in his poems and proses.

研究分野：中国文学

キーワード：琉球 漢文学 蔡大鼎 冊封使 江戸上り

## 1. 研究開始当初の背景

近世の琉球王国の士族の文化的営為であり、また彼等の教養の水準をも示す漢詩文を収録していた漢詩文集は明治初年の琉球処分による国家の崩壊の後、その多くが徐々に沖縄県外に流出し、あるいは苛烈な沖縄戦で焼亡してしまった。それに加え、学術分野としても未成熟だった琉球漢文学研究は、真境名安興・島尻勝太郎・上里賢一などの諸氏の先駆的な業績があるものの、全般的には琉球処分から沖縄戦、米軍統治と日本復帰に至る沖縄近現代史の歩みとともにあった琉球学・沖縄学のなかにおいて研究が遅れていた。

特に琉球王国最末期の漢文学者である蔡大鼎は琉球史上最多の作品を遺したにもかかわらず、彼に対する研究は晩年の琉球救国運動に関する歴史学からの考察を除いてほとんどなかった。また彼の漢詩文集のうち『閩山游草』『続閩山游草』『北燕游草』は輿石豊伸氏による私家版の訳も刊行されたが、誤りが多く、現在の研究において参照することは困難な状態であった。

しかし、2002年、研究代表者がそれまで確認されていなかった『漏刻楼集』『伊計村遊草』『欽思堂詩文集』『続欽思堂集』『聖覽詩文稿』など、蔡大鼎が琉球国内で歌った作品を収める漢詩文集の存在を報告した。これ以降、蔡大鼎の漢詩文集および関連資料が続々と確認され、その一部は『琉球王国漢文文献集成』（復旦大学出版社）等で影印出版された。このような資料の発掘に伴い、蔡大鼎とその作品に関する研究も近年、著しく進展した。研究代表者は基盤研究(B)「新出資料による琉球処分期琉球知識人の総合的研究 そのアイデンティティに着目して」(研究代表者高津孝氏)に参加するなどして、和文資料を含む新出資料をもとに蔡大鼎の伝記研究等を進めてきた。また研究代表者や高津孝氏等によって蔡大鼎の作品の一部が訳注として公刊されている。

しかし、琉球漢文学研究は他の琉球学・沖縄学の分野に比べてなお遅れており、体系化も充分でない。そのため、その枠組みのなかだけで議論することは困難であった。このような状況下において、蔡大鼎の漢詩文に関する研究を周辺領域の研究とどう有機的に結びつけ、進めていくかが喫緊の課題となっていた。

研究代表者はこういった現状と課題に鑑み、文学研究・歴史研究などの学術分野や中国文学研究・琉球学研究といった各国家・地域研究を横断した学際的研究として、前近代最末期の琉球を生きた蔡大鼎の漢詩文について文献研究・フィールドワークを併用して実証的に調査・分析し、彼の日本・中国・琉球に関する知の形成・集積の諸相を解明しようと着想した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は蔡大鼎の漢詩文について実証的に調査・分析し、彼の日本・中国・琉球に関する知の形成と集積の諸相を解明することにある。具体的には彼の漢詩文集を中心に新出資料と既知の資料を総合的に用いて次の点を明らかにすることを目指す。

### (1) 読書・学習による知の形成・集積

蔡大鼎の漢詩文に見える書名・作品名あるいは漢詩文の引用、さらには日本・中国・琉球の地名や歴史的人物の名などは、基本的に漢籍などの書籍の流入とそれに伴う読書・学習によって形成、集積され、漢詩文として表現された日本・中国・琉球に関する知を示している。したがって、本研究ではそれらの出典、特に蔡大鼎が用いたであろう書籍・資料(漢文・和文ともに含む)等を検討し、彼の知の形成とその集積の状況を明らかにする。

### (2) 他者との交流と知の形成・集積

蔡大鼎と交流のあった日本・中国・琉球の人物について、その経歴や作品、関連資料を調査・分析することで、蔡大鼎と彼等との交流の実態を検討し、その交流が蔡大鼎における知の形成・集積にどのような役割を果たしていったかを解明する。

### (3) 実体験と文献的知識とが融合した知の形成・集積

蔡大鼎が実際に訪れ、作品を遺した琉球・中国・日本(薩摩)の都市・形勝・施設等についてフィールドワークを行い、蔡大鼎において実体験と文献的知識とがどのように融合して新たな知となり、漢詩文という形で表現されたのかを明らかにする。中国における調査対象地域については、これまで蔡大鼎の作品との関係が深いものの、なお多くの課題を残している福建省ならびにまだ十分に調査が行われていない浙江省南西部の調査に重点を置く。

## 3. 研究の方法

上述の目的を実現するために、本研究は蔡大鼎の生涯に即して考察を進めることとした。具体的には青年期の作品(『漏刻楼集』『伊計村遊草』『欽思堂詩文集』)、壮年期の作品(『続欽思堂集』『聖覽詩文稿』)ならびに中国大陸で創作した作品(『閩山游草』『続閩山游草』『北燕游草』『北上雑記』)に分けて、それぞれから書名、作品名、漢詩文の引用、日本・中国・琉球の地名、歴史的人物の名などを抽出し、それらの出典、特に蔡大鼎が用いたであろう書籍・資料(漢文・和文ともに含む)等を検討し、彼の知の形成・集積の状況を明らかにした。

また、蔡大鼎と交流のあった人物に関しても、蔡大鼎の作品および関連資料をもとに調査を進めた。まず、琉球国内の人々については、漢詩文の他に家譜資料や尚家文書、書画なども利用し、

その交流の実態を明らかにした。ついで薩摩の人々、特に鮫島白鶴・八田知紀との交流に着目し、これまでの琉球漢文学研究ではほとんど用いられなかった和文資料も含めて調査を進めた。中国側の人士については、蔡大鼎の尺牘や中国側の序文、地方志なども調査対象とすることで、特に福建省出身者との交流の様相に対して考察を加えた。これらの調査を通して、蔡大鼎が他者との交流を通じてどのように知の形成と集積を図ったのか、その一端を明らかにした。

さらに沖縄県・鹿児島県・中国福建省を訪れて、蔡大鼎が琉球国内外で詩を詠じた都市・形勝・施設等についてフィールドワークを行い、その現状を確認するとともに、歴史的、文学的背景を考察した。それによって、蔡大鼎が特に着目して作品に表現したものの、さらに文献的知識との融合の状況について検討を進めた。

その上で、これらを「琉球王国最末期の漢文学者・蔡大鼎の知の形成・集積」という統一的な視点、展望のもとに改めて整理、検討した。

#### 4. 研究成果

本研究は上述の研究目標および研究方法に基づいて、研究実施期間に文献調査ならびにフィールドワークによるデータの収集・整理を行った。さらに、それらのデータに対する分析、考察を通じて、新たな知見、今後の研究に対する見通しを得ることができた。

「(1) 読書・学習による知の形成・集積」については、琉球・中国・日本に関するそれぞれの知の形成と集積の状況が具体的に明らかとなった。

まず、蔡大鼎が琉球の文学・音楽にも通じていたことを示す作品群を分析、考察した。特に注目されるのが、『欽思堂詩文集』巻二所収の「仲島曲」以下の十四首である。蔡大鼎はその冒頭の作品である「仲島曲」の題下注で「土歌を述ぶ」と記し、かつ現存する琉歌（琉球の短詞形歌謡）との間に詩意や語彙における共通点が見られるため、これら十四首は蔡大鼎が琉歌を七言絶句の形で、いわば翻案、あるいは漢詩訳をしたものだと考えられる。このように、蔡大鼎は漢詩文を読書・学習したのみならず、琉球の文芸への理解があり、さらにそれに対する関心をも示していた。そして、その背景に冊封使の歓待にあたって組踊が漢訳されていたこと、またそのなかに見える歌詞も七言二句の形式で訳されていたことがあると思われる」と論じた。

中国に関する知の形成と集積については、まず、各作品における典故の使用状況、また地名や人名、書名について調査、分析し、その結果、蔡大鼎が漢籍、すなわち経・史・子・集の諸文献から広く知を集積し、漢詩文に用いていることを確認した。なお、その成果については、現在準備している蔡大鼎の漢詩文の訳注に反映させる予定である。

さらに、そのような典故や詩語のみならず、中国古典詩における詩題・詩型と内容の関係についても、蔡大鼎は一定程度、理解していた。たとえば、蔡大鼎は前述した琉歌を翻案・漢詩訳したとされる十四首に「～曲」という詩題を与えており、彼が中国古典詩における「曲」と「歌」の相違を把握していたことを示している。また、蔡大鼎の詩における「離別詩」の内容と詩型を考察した結果、蔡大鼎は「離別」が中国古典詩において重要な詩題であると認識していたこと、かつ詩型の持つ表現機能の相違を早い時期から少なくとも経験的に理解し、徐々に明確化していったことが確認された。

日本に関しては、薩摩の歌人である八田知紀に送った「寄賀桃岡夫子拳太学歌」について重点的に考察した。特に、八田知紀の経歴や和文資料に即して考察した結果、この「寄賀桃岡夫子拳太学歌」は八田知紀が明治新政府から任官されたことを祝賀する、かなり儀礼的な作品であったことを指摘し得た。それとともに、八田知紀とその和歌がこの時期の琉球に対して持っていた大きな影響力について、蔡大鼎がそれを十分に把握していたことをこの詩は示していると論じた。

このように、蔡大鼎の作品に即して、彼が琉球・中国・日本に関する知を読書や学習などによって形成、集積していたことを明らかにした。特に、漢詩文のみならず、琉球や日本に関する文学や芸能に対しても一定の理解や関心があったことを確認できたのは本研究の大きな成果と言えるだろう。

「(2) 他者との交流と知の形成・集積」については、蔡大鼎が琉球・中国・日本の人々との交流から知を吸収していたことを確認した。

まず、蔡大鼎と中国の人士との間で交わされた尺牘（書簡）や詩歌、ならびに蔡大鼎の詩文集に対して贈られた序等について調査、分析を行った。その結果、特に福州の人々が蔡大鼎に書籍や書画、詩文を贈り、さらには彼の詩の添削を行っていた状況が具体的に明らかとなった。そして、これらの交流は蔡大鼎の知の形成に大きな役割を果たしたと考えられる。

また、蔡大鼎は琉球・日本の人々とも交流し、詩文を応酬していた。注目に値するのは、蔡大鼎と前述の八田知紀を結びつけた人物として、薩摩藩の人士もしくは宜湾朝保などの琉球の歌人が想定されることである。前者に関しては、蔡大鼎は八田知紀以外の薩摩藩の人物にも詩を送っており、彼と薩摩の間に交流があったことを示している。後者については、蔡大鼎を含む琉球の文人間で文雅な交流が存在し、そのなかで漢詩と和歌がともに用いられていたことを確認し得た。このように、蔡大鼎は日本や琉球の人々との交流などを通して、和歌への知見を得ていたと考えられる。

「(3) 実体験と文献的知識とが融合した知の形成・集積」については、琉球国内は沖縄本島、石垣島、宮古島、慶良間諸島、琉球国外は福建省（特に福州を中心とした地域）ならびに鹿児島市においてフィールドワークを実施し、実際に蔡大鼎の詩文において言及される場所を特定するとともに現況を把握した。さらに、文献調査によって、蔡大鼎がそれらの場所においてどのよ

うに詩文に詠っているか、また、その創作時の蔡大鼎の情況などを考察した。

一方、浙江省南西部などの調査については、新型コロナウイルスの流行により、フィールドワークを実施することができなかつたため、文献調査のみに止まらざるを得なかつた。

以上の成果は、論文の公刊や国際学会での口頭発表を行い、国民ならびに全世界に広く公開している、または公開予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 紺野達也	4. 巻 19・20
2. 論文標題 赴日使節與日本文人之間詩文交往-以渤海國與琉球國之使節爲例-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國際漢學研究通訊	6. 最初と最後の頁 107-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 紺野達也	4. 巻 上
2. 論文標題 蔡大鼎の離別詩について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第十七届中琉歴史関係国際学会論文集	6. 最初と最後の頁 295-306
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 紺野達也	4. 巻 70(2)
2. 論文標題 何遜墓と憶梅亭—詩跡研究からの一考察—	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸外大論叢	6. 最初と最後の頁 93-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 紺野達也	4. 巻 6
2. 論文標題 宋代における柳宗元の「記」の評価について—その展開を中心に—	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本宋代文學學會報	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紺野達也	4. 巻 1
2. 論文標題 琉球漢詩人蔡大鼎と琉球の文学・音楽との関わりについての初歩的考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 2018和漢比較文学研討会論文集	6. 最初と最後の頁 139-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紺野達也	4. 巻 1
2. 論文標題 琉球漢文學者蔡大鼎與近世晩期中琉詩文交流	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 使節・海商・僧侶 近世東亞文化意象形塑過程的中介者	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紺野達也	4. 巻 220
2. 論文標題 詩人たちの就職活動ー科挙・恩蔭・献賦出身	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アジア遊学220 杜甫と玄宗皇帝の時代	6. 最初と最後の頁 176-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紺野達也	4. 巻 1
2. 論文標題 蘇洵と科挙	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 唐宋八大家の世界	6. 最初と最後の頁 103-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紺野達也	4. 巻 1
2. 論文標題 琉球漢詩人蔡大鼎と薩摩の歌人八田知紀の交流 「寄賀桃岡夫子拳太学歌」を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 和漢比較文学シンポジウム2017予稿集	6. 最初と最後の頁 43-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紺野達也	4. 巻 3
2. 論文標題 劉辰翁の『モウ川集』評について 「漸可語禪」を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本宋代文学学会報	6. 最初と最後の頁 130-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紺野達也	4. 巻 下
2. 論文標題 王維『モウ川集』に対する顧起経の注釈について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国古籍文化研究 稲畑耕一郎教授退休記念論集	6. 最初と最後の頁 73-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 紺野達也
2. 発表標題 日本と東アジアの漢詩文の交流ー中国文明の伝播という視点からー
3. 学会等名 平成30年度共同研究班「グローバル時代の新しい教養ー未来に向けた日中交流と日中相互関係」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 紺野達也
2. 発表標題 赴日使節與日本文人之間詩文交往-以渤海國與琉球國之使節爲例-
3. 学会等名 中華文明傳播史系列工作坊 中國古典文學在東亞傳播與接受（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 紺野達也
2. 発表標題 宋人對柳宗元”記”的評價
3. 学会等名 東亞視域中的漢籍研究中日學者學術研討會（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 紺野達也
2. 発表標題 琉球漢詩文的現況－以蔡大鼎爲中心－
3. 学会等名 南京大学文学院（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 紺野達也
2. 発表標題 蔡大鼎の離別詩について
3. 学会等名 第17回中琉歴史関係国際学会議（國際学会）
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 紺野達也
2. 発表標題 琉球漢詩人蔡大鼎と琉球の文学・音楽との関わりについての初歩的考察
3. 学会等名 和漢比較文学会第11回特別例会 2018年和漢比較文学会議（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 紺野達也
2. 発表標題 琉球漢文學者蔡大鼎與近世晚期中琉詩文交流
3. 学会等名 使節・海商・僧侶 近世東亞文化意象形塑過程の中介者（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 紺野達也
2. 発表標題 柳宗元の「記」の評価について
3. 学会等名 第3回 唐宋八大家シンポジウム（第303回中国文藝座談会）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 紺野達也
2. 発表標題 琉球漢詩人蔡大鼎と薩摩の佳人八田知紀の交流 「寄賀桃岡夫子拳太学歌」を中心に
3. 学会等名 和漢比較文学会第10回特別例会(和漢比較文学会・西北大学日本文化研究センター)（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 紺野達也
2. 発表標題 顧起經對王維《モウ川集》的注釋
3. 学会等名 中日漢籍學術研討會(北京大学)(國際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 紺野達也
2. 発表標題 蔡大鼎の尺牘について 福州の人士との交流を中心に
3. 学会等名 第16回中琉歴史関係國際學術會議 守礼之邦：中琉関係とアジア文明(國際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した國際研究集会

〔國際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した國際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関